



東京学芸大学リポジトリ

Tokyo Gakugei University Repository

オーストラリア・ビクトリア州における現地教育の
現状：メルボルン日本人学校の勤務経験から

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-04-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山本,俊泰 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2309/00173698

オーストラリア・ビクトリア州における現地教育の現状 ーメルボルン日本人学校の勤務経験からー

前メルボルン日本人学校教諭

茨城県立美浦特別支援学校教諭 山本 俊泰

キーワード：現地教育、教育制度、日本との特色の違い

1. はじめに

私は、茨城県では特別支援学校に勤務し、主に中・高の生徒に対し指導をしてきた。平成29年4月、縁あって在外教育施設で教壇に立つ機会を頂き、メルボルン日本人学校（以降：メル校）に赴任した。メル校には特別支援学級はなく、平成29年度は小学校2年生、平成30年度と令和元年度は小学校1年生を担当した。メル校の教育活動の1つに交流学習があり、現地の小学校に行くことがあった。そこで、現地校の様子や特別支援を要する児童生徒への対応を目にする機会があり、現地校で働く先生にも様子を聞くことができた。交流は毎年行っており、そこで分かったことや調べたことを紹介したい。

補足（メル校の交流学習の取り組み）

日本語を第二言語として学んでいる現地校との交流学習を小学部、中学部と英語の学習レベルに合わせて行っている。1年目の交流学習では、Sydenham-Hillside Primary Schoolに、2・3年目には、Caulfield Primary Schoolに行ってきた。どちらの学校でも、日本語と英語を交えながら一緒に授業やゲームに取り組んだり、休み時間に一緒に遊んだり、毎回、交流を深めている。

2. オーストラリアの教育制度

（1）制度

オーストラリアの初等・中等教育は12年制（ただし州によって就学年齢は異なる）。義務教育期間は6～15歳（タスマニアのみ16歳）で、Year1～Year10と呼ばれる。

オーストラリアで中学校を修了するYear10は、日本では高校1年生にあたる。中学校を修了すると就職か進学かの選択となるが、学習についていけない生徒や、家庭の事情により進学しないケースも多い。

大学進学希望者はYear11～Year12に進級し、Year12終了前に、各州で行われる「統一高等学校資格試験」の成績と、高校の成績を通して希望大学の入学可否が決まる。

大学進学にはどの高校に入るかも重要になるようである。地域によって高校のレベルが違うため、家庭によっては、レベルの高い高校に入るために、小・中の時から地域を選ぶケースもある。

ちなみに、オーストラリアでは、専門知識をもった人は安定した職業を得ることができるため、大学進学が一番とは考えていないようで、公立職業専門学校（TAFE）に通うケースも多い。

（2）オーストラリアの教育観

オーストラリアの子どもたちは、授業において、答えに自信がなくても手を挙げて発言をし、間違っても気にしない子が多い。日本の子どもたちにも是非見習ってほしい部分でもあるが、そこには、「知識」よりも「考える力」や「コミュニケーション能力」の育成に力を入れているオーストラリアの教育がある。子どもたち自身が調べたいテーマを考え、それを基に物事を考え、グループで話し合い、授業の中で得た知識をどのように現実社会に応用していくかに重点を置いている。小学校低学年のうちから、グループディスカッションやプレゼンテーション、リサ

一チワーク（調べ学習）を少しずつ学ぶことで、専門学校や大学にたどり着いた時に、それまでの知識が最大限に生かせるよう教育のシステムが考えられている。

(3) ビクトリア州の特別支援教育

Inclusive Education（インクルーシブ教育）の考え方を取り入れている。オーストラリアは多民族、多文化国家であるため、異なる学習方法を要する障害も含めて受け入れている。生徒の違いを歓迎し、多様性を称え全ての児童生徒のニーズ達成に向けて支援をしている。

3. 現地校の学校生活の様子

(1) 授業風景


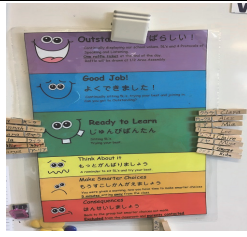

授業時間は約 60 分。交流学习時の様子で多かったのが、机を使わず、子どもたちが床に座り先生の話を聞いたりする場面であった。座る姿勢はあぐら。書くときには、寝そべってもよいなどかなり自由な感じを受ける。もちろん授業内容により、机を使う時もある。

※ちなみに、日本式の体育座りや正座は、発育に良くないと考えられている。

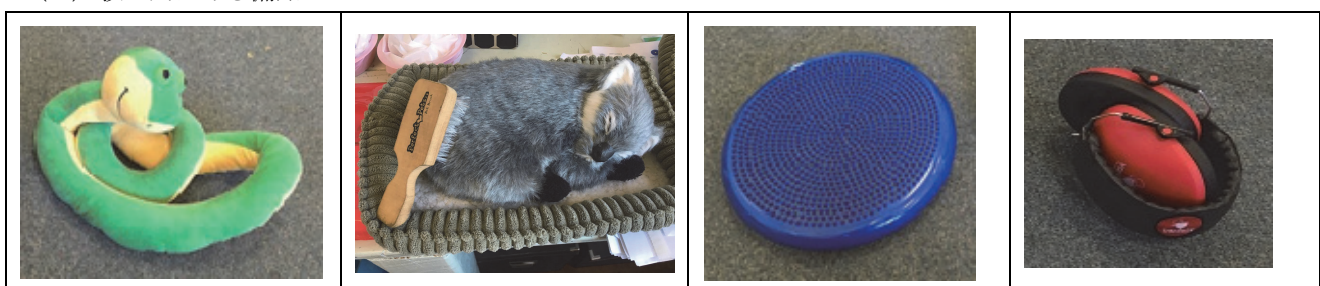
(2) バディシステム

トイレや事務室、保健室等に用があつて授業中に教室を出るときは、安全のためにクラスメイトでバディ（2人1組）を作って行動をしている。トイレに行くことは授業中いつでも認められているため、バディの子がトイレに行きたくなったら、ペアの子は、やりかけのことがあつても中断してついて行かなければならない。バディは毎朝、出席の様子を見て決めている。

(3) 教室にある掲示物

		
<p>【ゾーン（気持ち）のコントロール表】 特別支援学校にあるものだが、現地校でも使用している。</p>	<p>【自分の態度を表す視覚的物差し】 クリップの位置は緑から始まり、一番下まで下がると右写真の反省コーナーに行く。</p>	<p>【教室の片隅に設けられている反省（クールダウン）コーナー】 みんなと反対側を向き、少しの間気持ちを落ち着かせる。</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・クラス全員が使用。 ・上記の3つとも日本では特別支援学級や特別支援学校で取り組んでいそうな物や配慮である。 		

(4) 教室にある備品



【重りの入ったトイ】 肩に乗せ、落ち着かせる効果 をねらう。	【アニマルセラピー】 心音と感触で心を落ち着か せる効果をねらう。	【ボコボコクッション】 刺激で心を落ち着かせる 効果をねらう。	【ヘッドホン】 不快な音を遮る効果。
<ul style="list-style-type: none"> ・配慮を要する児童だけでなく一般の児童も必要に応じて授業中に使用可。 ・日本では、特別支援学級や特別支援学校でも授業中に使用するのには制限されているケースが多い。 <p>★授業に意識を向けるために、こういったおもちゃ等を積極的に使用するという考え方に日本との違いを感じた。</p>			

(5) 現地校における特別支援の対応

授業中、配慮を要する児童は上記の物を使用したり、指示が通らなくなってしまった場合は、ゾーン（感情）の確認をさせたりして落ち着いて取り組めるように支援している。パニックになってしまった場合は、クールダウンコーナーで気持ちを落ち着かせることもある。

配慮を要する児童生徒に対し、individual learning plan（個別学習計画）や the Student Support Group（生徒支援グループ）を定期的に行っている。メンバーは、保護者、クラス担任、校長または校長が指名した者、保護者の擁護者、生徒（適切な場合）、コンサルタント。年間2～4回のミーティングを行っている。また、エイド（教育支援員）が付くケースがある。

4. まとめ

交流学習で現地校を見てきた他に、メルボルン国際日本人学校（土曜校）も見学をし、少しではあるがオーストラリアの学校について触れさせてもらった。そこで感じ取った日本との違いをまとめると以下ようになる。

決まり	授業中の姿勢	学校に持ってくる物	
日本	校則・規律を重んじる	読む、聞く、書くときの姿勢がきちつとしていて、全員が静かに落ち着いて授業に取り組んでいる。	持ち物に対し、制限有り。
オーストラリア	自由を重んじる	自分の好きな姿勢でリラックスして取り組める。クラスの中は賑やか。	自分が授業に集中できるものであれば、特に制限はない。

現地校の児童たちが、のびのびと学んでいたのが印象的である。ただ、メル校（日本の学校も含む）もオーストラリアの現地校もどちらにも素晴らしい考えがある。お互いに根本にあるのは、子どもたちに学校生活を楽しんでもらいたい、学習に意欲的に取り組んでもらいたいということである。どちらの子どもたちも物事に取り組む真剣なまなざし、達成感を得たときの満面の笑顔に満ちている。特別支援教育とは離れた3年間であったが、普通教育の面白さを発見できた貴重な3年間であったし、日本とは違う教育観に触れることができたのは今後の教員人生に大いに活かせると感じた。